

「面師 中原恵峰展 ～彫り続けて60年、未来へ～」 ギャラリートーク

平成26年6月21日（土）

エイブル2階交流プラザ・床の間コーナー

中原恵峰さんには、ギャラリートーク開始前から木彫りの実演をしていただきました。そして、会場いっぱいの良い香りが漂うなか、インタビュー形式でお話を伺いました。

Q. 先程からとても良い香りがしていますが、この香りの正体は何ですか。

この香りは、私が今彫っているクスノキの香りです。以前はクスノキから虫よけの樟脳が取れていましたが、今では、アロマとかポプリの材料として使われているようです。このノミ屑を玄関とか車に置くという方もおられます。なかには、各家庭で出る残飯に混ぜると虫が寄ってこないから、その後は肥料にするとか、そんな使い方をされる方もおられるようです。だから私もノミ屑は捨てないで取っておきます。



中原恵峰さん

Q. 中原さんは、どうしてクスノキを使われるのですか？

クスノキは、佐賀県の県木で手に入りやすし、木目がきれいです。ケヤキなんかもすごく木目はきれいですが、手間がかかるし、手にも入りにくいですね。クスノキは手に入りやすくて、今のところ一番適しているんじゃないかと思います

でも、クスノキは乾燥したらすごく硬くなって、割れやすくなります。

だから私は一年中仕事場の窓を開けたことがありません。乾燥した風が中に入るとヒビ割れしてしまう恐れがありますから。

Q. クスノキには、白楠、赤楠、青楠があるそうですが、どのような違いがあるのですか。

白楠が一番手に入りやすくて、私の作品の中では、やっぱり白楠が一番多いですね。今ここで彫っているのも白楠です。白っぽいですね。

赤楠は肌は赤いのですが、あまり木目は強くないです。

青楠は、ものすごく青の筋が濃くて非常に硬いです。仕上がってからロウにつけるのですが、非常に硬いのでツヤが出ますね。ただ、この青楠は数が少ないのです。買おうとしてもなかなか手に入りません。私も彫り始めて60年になりますが、今までに3回くらいしか、この青楠に出会ったことはないのですよ。でも不思議に、この展示する機会に青楠が入ってきたんですね。床の間コーナーに今回展示している青楠の面は、ごく最近作ったばかりの作品です。



制作途中の面

Q. クスノキの善し悪しというのは、立木、立っている状態でも分かるのでしょうか？

立っている状態では、中がどんな色をしているか、使い物になるかどうかは分かりません。例えば、魚のマグロは尻尾を落としてありますが、おそらく、あそこに魚の内の状態が出ていると思うのですね。これと同じで、私達も切り口を見ないと、立った状態では中は分からないですね。

Q. この木の大きさは、根っこの回りを直径でいうと、どれくらいですか？

根っこの回りは、直径で80cmから1mくらいの材料です。上の方でも、60cm以下はあまり使わないですね。というのも、外側にあまり色のよくない部分があるので、その部分は全部捨てます。芯の部分も、絶対割れが入るので捨てます。だから、捨てるところがいっぱい出てきます。

Q. 木を切り倒す時期も、木の善し悪しに関係しますか？

それが一番大事ですね。

2月も終わり頃になると新芽が出てきますが、新芽が出るということは、木に水分が上がっているということなのです。木の切り口が、今にも水が出てこないかというような感じで濡れています。

だから実際に使うのは、12月から2月初めの頃に伐採した材料です。その時期には水分が上がっていません。いわば木材が冬眠した状態なのです。すると、材木を伐採しても切り口がカラッとしています。水分が上がっていないから。

木彫りの場合は、倒す時期が悪い木は、乾燥させてもノミの当たりが違います。また、時期が悪い時の材料を使うと、ほとんど虫がつきます。虫も知っているんですね、その時期の材料というのを。

Q. 倒してから乾燥させる期間というのは、どれくらいですか？

早く製材すると割れが入るので、丸太のまま約3年くらい乾燥させてから、製材して2m位の長さにします。風通しのいいように栈木を敷いて、また上に重ねて自然乾燥させます。3年くらいした材料でもものすごく重たい。水分がまだいっぱいあります。それからさらに製材して、面の厚みを15cmくらいの材料にして風通しをしますが、3年くらい自然乾燥した材料は乾く時間が早いですね。倒したてのは、なかなか乾燥しません。

Q. 彫るときに苦労されるのは、どういう点ですか？

直径 60 cm くらいの丸太から、面は十分に 4 つは取れます。しかし、材料を節約して 4 つ取ろうとした場合、木目が片方だけに片寄ってしまいます。だから私は、両端を捨てて、真ん中で 2 つとっています。そうすると、木目がちょうど左右同じに出てくるんです。塗り物としては 4 つ取っても構わないと思うのですが、白木の場合は、木目のことを考えてとるので、材料の捨てる部分が多くなります。

面彫りに使うのは、もともと根っこから長さ 4 メートルくらいの材料なのですが、全部こんなに青の色が強いかというそうではないのです。下から 2m くらいの材料が木目が良く出ます。そして、南側の太陽の当たる方と、太陽の当たらない裏側とは、色が違ってくるのです。おそらく、色の強い方が南側の方じゃないかと自分では想像しています。

また、木の上の方には、小さい時の枝の芯が中に入っているんですよ。だから作ろうとしても、芯がポツツ、ポツツと出たりしますので、ここに小さい枝の跡の芯が出たら、作る側としては、お客さんに渡しにくいですね。なんか、不良品みたいで。だから、白木の場合は、ものすごく材料を捨てる場所が多くなります。

やっぱりいい材料に行き当たった時には、こういう面が出るということは頭に浮かんできますので、木目がきれいに出るように、製材するときも、製材所に行って、つきっきりで、こういうふうに製材してくださいと注文を付けます。

Q. 中原さんが面師の世界に入られたきっかけは？

私は長崎県の、今は諫早市高来町になっていますが、もとは北高来郡高来町の湯江^{ゆゑ}の出身なんです。

きっかけは、中学 3 年のちょうど就職活動の時期に、小森さんという先生が彫刻の弟子を一人募集しているということで、お話にみえられたのですね。私もその当時はこの彫刻の世界というのはよくは知らなかったのですが、私は子供の頃から、いろんなモノ造りというのが好きだったので、すぐ、この世界に入ろうかな、という気持ちになりました。

だけど、家でこの話をすると、家族がびっくりするんですよ。彫刻の世界って、どんな世界なのか分からない。そんな仕事をして生活していけるのかという心配が大きかったようですね。やっぱり、家族にしてみると、彫刻の世界にもものすごく心配だったようです。

しかし、私は、この世界と決めていましたから、家族の心配をよそに、この世界に飛び込んできたわけです。でも、まだその当時、15 歳ですよ。今考えると子供ですよ。先にどんな生活をしていくのかよく考えないで、ただ、好きだからと、その思いで飛び込んできました。今考えると、その当時が懐かしいですね。

昭和 29 年 3 月に湯江中学校を卒業して、弟子入りするために、4 月 2 日に肥前鹿島駅に降りたのですが、ちょうど鹿島市が市制施行された年で、市制祝賀の看板がいっぱいありましたよ。その当時は、おそらく 4 万人くらいの人口があったんじゃないですかね。

Q. 弟子入りされてからの修業生活とはどのようなものだったのですか？

その当時はまだほとんどが手仕事で、ノコで材料を切るにしても、全部手で切る時代ですし、板を削るにしても、手で、カンナで削るんです。しかし、私は家が農家だったので、ノコにしてもカンナにしても全く知識はありませんでした。だから、弟子に入っても、何もできない。親方に行ってみれば私にさせる仕事はなかったのではないのでしょうか。



ギャラリートーク会場風景

そこが、やっぱり、二代目とか三代目という方とは違う。先代の方がおられるところでは、小さいころから見ているので、おそらく、ある程度のことは初めてでもできると思いますね。私は、プロの道具を見たのは、全く初めてでした。そして初めて、この世界はこんな仕事なのかと思うくらい。難しかったですね。今はほとんど機械がありますが、昔は手で全部やってきましたから、よけいにですね。親方達が道具を使うのを見て、私の使う道具よりいい道具を使っていると、そう思っていたんです。結局長い間使って自分で覚えるしかなかったですね。だから、その当時の苦勞に比べたら何にでも耐えていけるとと思いますね。

また、その当時は社会全体が貧しくて、まだ面が売れる時代ではなかったですね。面や彫刻品を買って自宅に飾るとか、そんな時代ではなかった。その当時は、お菓子のラクガンの型とか、彫刻欄間、間仕切り欄間とかですね。でも、間仕切り欄間を自分の家に飾るといふ人は滅多にいないくらい、まだ、そんな時代です。それから、たまに神社、仏閣の仕事とか。

やはり、先も言ったように、一番多かったのは菓子の木型の仕事ですね。そして、時代の流れによって、彫刻欄間などの木彫りの仕事が出てくるんですね。

私が5年間の修業を終えたのが20歳の時、昭和34年です。まだ、その当時は、彫刻欄間をはめるといふ家は少なかったですね。

でも、昭和34、5年位の頃には、ずいぶんと面の仕事が出てきました。最初の面を彫ったのは、今も覚えていますけれども、すごく難しかったです。親方から面の彫り方を教わったわけじゃないですから。自分で独学で勉強しました。

今はその点、いろんな教室があって、そこで勉強できますから、今の方が楽ですね。しかし、今考えると、最初から機械を使わずに、全部手仕事で、苦勞したからいいんじゃないかと思います。



兜

Q. 10代後半のつらい修業時代を支えてくれたものは何ですか？

中学時代に二人の恩師が書いてくれたメッセージの紙を、今もずっと大事にしています。

一枚は国語の先生からいただいたもの。

「ぐーんと胸を張れ、ずっと向こうを向いてみたまえ。必ずや君の行く手は開けていくに違いない。道草を食ってもいい。休憩をしても良い。しかし目標だけは忘れるな。」

今は大変な時代だけど君の行く手はきっと開けていくに違いない。これを信じてずっとやってきました。



鯉

もう一枚、この人は、体育の先生で、就職活動の先生でもありました。

「君の進まんとする君の仕事は、努力なしにては出来ない。でも君だけにできる、努力の涙、怠るな努力を」

この二つだけはずっと、自分の心の中にしまって、書いたものを見なくても、思い出しながら頑張ってきたんです。本当にいい言葉をいただいて、ありがたかったです。

Q. 中原さんの姿勢の良さ、健康の秘訣は何ですか？

私はスポーツが好きで、若い頃からソフトボールをしたり、野球をしたり、それから、社交ダンスも20歳の頃からやっています。あの当時には、高津原にあるダンス教習所に、よく通ったもんです。親方からは、ダンスする時間があったら、他にもっと勉強するところがあるじゃろと言われていましたが（笑）。

しかし、今考えてみると、私たちの仕事の姿勢は、足は使わなくて、同じ格好で、同じところだけしか使わない。だから、今振り返ってみると、ソフトボールをしたり、野球をしたり、社交ダンスをしたり、というのが、今健康である証拠じゃないかと思うんです。

だから、普段胡座あぐらをかいて仕事をしているので、食事の時は正座です。その他の時もなるべく正座をします。姿勢というのは、健康に繋がるような気がしますね。

Q. 中原さんにとって、面彫りとは何ですか？

先ほども申しましたように、私は長崎県の湯江の出身ですが、小学校3年生の頃に、面浮立に出会いました。私の郷では、面浮立のことをカケウチというのですが、夕方になると毎日稽古ですね。未だに、子供の頃に稽古したのはできるような気がします。だから、この面浮立とご縁があったのだと思います。

今、この面を彫らせてもらうということは、非常に生き甲斐を感じています。60年この仕事をしていますが、今よりも、次の仕事はまだ、どこをどうしたら良くなるかとか、そういうふうに考えますか

ら、この面作りに生き甲斐を感じるのです。面浮立があるから、面作りというのがあるから、この世界で生きていけるのですけれども。

面浮立にしても、保存会の人は大変だと思いますよ、伝承していくのは。しかし、私達の仕事も、日本の伝統工芸であり、日本の文化、佐賀県の文化ですので、こんないい仕事に携わられて本当に幸せだなあと、今思っています。まだまだ頑張っていこうと思っています。

また、浮立もそうですが、今後の後継者を育てていかなければいけないと思うのです。これも私に課せられた仕事と思っています。

幸いにして、私には一人息子がおりますが、18歳の頃から、本職ではなしに、ずっと、面は作らせています。一応、私と同じ面は作るのですが、各地区の浮立面はまだ難しいと思います。同じに作らなければなりませんから。まあ、これでいいという時はないし、いつまでも勉強ですから、息子が続けてくれることを期待していますが。

やはり、私がここまでやってこれたのは、作らせてくださる人があったからだと思います。だから自分一人では生きていけないということは、強く感じて生きてきました。皆さんのおかげでここまで来れて、60年の記念の年にこういう場所もいただいて、私は恵まれている点が非常に多いと思います。これからは浮立面について勉強して頑張っていこうと思っていますし、繋げていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

<質疑応答>

質. その面は左右同じですか？

私が自分の作品として作る場合は、努めて左右対称に作っています。しかし、各地区に伝わる古い面の中には、いくらか違うところがあります。

質. 面を1つ作るのに、どれくらいの時間がかかるのですか？

この白木の面で、彫るのに1週間くらい。その後、家内がロウを溶かして、布で擦って艶を出していきます。冬にはロウが固まるんですよ。夏は固まりにくいですけど。

しかし、その前に、材料を買いに行ったり、製材所に行ったり、乾燥させるために風通しをしたり、そういった時間が要ります。

また、途中で、白木の場合は傷が出て、やめる場合があります。もったいないですが、しかし、そんなのをお客さんに渡したら、後は続かないと思いますので、その辺は割り切って、良い面だけを作ろうと思っています。

質. 県木のクスノキは、今後このまま続くと思われませんか？

佐賀県木で、材料はいっぱいあります。材料に不自由することはないと



青楠の浮立面

と思いますが、よい材料を求めるのは大変です。自分が求める材料と出会うのは大変です。

質. 青楠と白楠では、かなり材料費は違いますか？

材料は、売る側としては本当は同じと思うのですよ。しかし、私が青楠を好むので、少し高く売ろうとされますね（笑）。

質. 1つ1つ作るのに魂が入っているんですね。それが入らないと、やはり出来栄えに影響しますか？

面に限らず、モノ作りには、すごく集中できる時と、そうでない時があります。気持ちの入った時には、スムーズにいくことも、気持ちが乗らん時や仕方なしに仕事する時には、なかなかうまくいきません。魂が入らんと、お客さんに失礼になるし、だから一番苦勞するのは睡眠不足ですね。面を作る時も、熟睡した時は、気持ちがスムーズに入るし、無心になると集中できます。やはり、私がここまで仕事させて貰えるのも、そのへんだと思うのですよ。自分で納得した作品を作りたいですね。

質. 最近は電気ドリルとか電気ノミとか、いろいろな機器がありますが、お使いにならないのですか。もし使われたら仕事がずいぶん早くなるんじゃないかという気もしますが。

私が弟子に入った頃は全部手作業でした。その3年後ぐらいには、大工さんが使う電気鋸とか電気カンナが出てきたと思うのですよ。今では、幅や長さを揃えるのには、帯鋸で切断していきます。しかし、彫刻刀で彫る場合は、全部手なんです。最初は、言われたような電気の道具がありますが、手でした方が早いんですね。そして、手でした方が自分の技術が上がっていくんじゃないかと思えますね、機械に頼るよりも。



作品解説中

後は、すべて、この線を作るのにも手で叩いてやっています。私の場合は、そっちの方が電気ノミでするよりも早くてきれいにいくような気がします。また、それしかした事がないですから。

質. 私も白木の面を持っていますが、ヒビ割れを防ぐ方法がありますか？

ヒビ割れは恐ろしいですね。もし、ヒビ割れの心配があれば、ロウを溶かして塗り、布で拭きあげたらよいです。

質. 白木仕上げはロウを塗ると言われましたが、各地区の面は全部色がついているのは？

これは漆です。漆専門の方に塗ってもらいます。

質. 漆面は割れないのですか？

膜を張りますから、まず、割れるということはありません。ただ、面浮立面に使う桐の木は柔らかいので、落としたりすると割れやすいですね。

先ほど、先生から面づくりにかかる思いなどもお話いただきましたが、そういう伝統工芸が今後続いていくためには、作り手だけでなく、それを私たちが理解し応援していくことが大事だと改めて感じました。皆さんも、中原さんが材料にとことんこだわって作っておられる様子を聞かれて、いろいろ感じられたのではないかと思います。

浮立面づくりが今後末永く続いていくことをお祈りして、今日のギャラリートークを終了したいと思います。

本日は、長時間、最後までありがとうございました。



床の間コーナー展示風景



交流プラザ展示風景